

# 高等学校芸術科音楽における現代音楽の鑑賞指導の工夫

広島県立福山明王台高等学校

教諭 沖藤 奈々

## I はじめに

### 1 主題設定の理由

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術編』（以下『解説』とする）では、「音楽Ⅰ」で扱う教材について「芸術科音楽の指導においては、指導のねらいを実現するために、特定の地域や時代に偏ることなく、生徒の特性や興味・関心、学校や地域の実態等を考慮し、幅広い教材の中から適切に教材を選択することが重要である。」<sup>1</sup>と述べられている。

筆者はこれまで鑑賞領域の指導において現代音楽を扱う際に、音楽の表面的な特徴や大まかな概念の学習のみに終始し、生徒自らが音楽のよさを感じ取るまでに至っていないと感じていた。その理由として、現代音楽は楽曲が複雑で難解であると感じられるために、聴かせ方について明確な指針を持つことができなかったことが挙げられる。しかし、現代音楽の作品には音楽を形づくっている要素そのものが楽曲の構成の上で特徴的な役割を果たしているものが数多くある。このことから、楽曲を構成する要素に焦点を当てた指導を行うことによって、曲想や表現上の効果と音楽の構造との関わりについて理解を深め、よさを味わうことにつながるのではないかと考えた。

そこで、本研究では現代音楽の鑑賞の学習において、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したことの関わりについて考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くための指導の工夫について、授業実践を通して検討する。

## 2 研究の基本的な考え方

### （1）現代音楽とは

『新編 音楽中辞典（音楽之友社、2007）』には、現代音楽は「20世紀に生まれた西洋芸術音楽の総称であり、伝統的な様式から決別を目指して様々な前衛的スタイルが生み出され、多様な音楽様式が共存する多元的様式の時代である」と記述されている<sup>2</sup>。沼野（2005）はリゲティ・ベリオ・ブーレーズの作品研究の中で前衛的音楽作品がもつ音楽的特徴を①十二音技法およびトータルセリアリズムなどの導入による完全な無調、②無調に伴う非拍節的なリズム（自由リズム）、③特殊奏法をはじめとする伝統的な楽器法の拡張、電子楽器の使用、④不確実性（偶然性、即興性）の導入の4つに分類している<sup>3</sup>。本研究では現代音楽を以上の4つの音楽的特徴をもつものとして扱うこととする。こうした現代音楽の音楽的特徴と文化的・歴史的背景との関わりや音楽的特徴が醸し出す曲想や表現上の効果と音楽の構造との関わりを理解し、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くことができるよう指導する。

<sup>1</sup> 文部科学省（平成31年）：『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説芸術編』教育図書株式会社，p. 58

<sup>2</sup> 『新編 音楽中辞典』（2007）音楽之友社，p. 222，p. 477

<sup>3</sup> 沼野雄司（2005）『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ 前衛の終焉と現代音楽のゆくえ』音楽之友社，pp. 19-20

## (2) 現代音楽の鑑賞学習の指導過程～ドイツ語圏における教育実践を視点として

ドイツ語圏の音楽教育では音や響きに対する感受性を高め、適切に音楽作品の価値判断ができることを目標とした教育が行われており、固定化された美的・文化的価値観によらずに音楽情報を判断し、解釈するためには、生徒が未だ出会ったことのない異国作品や現代音楽作品などに触れさせることが有効であるとされている。このようなドイツ語圏オーストリアの音楽教育における現代音楽の鑑賞学習指導のアプローチについて、中地（2010）は次の4つに分類している<sup>4</sup>。

- ①音楽通史的アプローチ
- ②縦断比較的アプローチ
- ③即興・創作に関連させたアプローチ
- ④演奏に関連させたアプローチ

その具体的な内容としては、③即興・創作に関連させたアプローチの例として、声による即興表現とJ. ケージの「Aria」を関連させた教材を挙げており、日本で「創造的音楽づくり」として展開された授業づくりと同種の教材が多数見られると記述している。また、④演奏に関連させたアプローチとしてA. シャオラーの合唱曲「INSEKT」を教材として、声のグリッサンドやクラスター、シュプレヒシュティンメなどを扱っていると例示している。これらのような実践によって、多様な音・音楽を受け止める耳・聴覚の育成が図られ、音楽を形づくっている要素に関する理解が促進されていると述べられている。

『解説』の内容の取扱いにおいて、(1)内容の「A表現」及び「B鑑賞」の指導については「〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図るものとする」と述べられている。現代音楽の鑑賞学習において学習の対象とする要素を明らかにし、演奏や即興・創作といった表現領域と関連させることによって、生徒の知覚・感受がより一層深まると期待できる。よって、本研究では③即興・創作に関連させたアプローチと④演奏に関連させたアプローチを実践し、その効果について検証することとした。

## II 研究の目的と手立て

### 1 研究の目的

現代音楽の鑑賞学習において、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したことの関わりについて考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くための指導の在り方を探る。

### 2 研究の手立て

#### (1) 演奏に関連させたアプローチ【手立てA】

曲想と音楽の構造との関わりについて、音楽を形づくっている要素の学習と演奏を関連させることにより、実感を伴った理解を図り、知覚したことと感受したことの関わりについて考えることができるようにする。

#### (2) 即興・創作に関連させたアプローチ【手立てB】

楽曲に用いられている表現技法と音楽の要素との関連を理解して楽曲を創作することで、作品の良さやおもしろさに気付かせ、音楽に対する価値意識を広げることができるようにする。

---

<sup>4</sup> 中地雅之ほか「現代音楽」のゆくえと音楽教育—その可能性を探る—1)『音楽教育学』日本音楽教育学会、第39号、pp. 60-68, 2010。

### Ⅲ 研究の概要

#### 1 生徒の学習状況の把握

本校普通科第1学年音楽選択生84名に10曲の楽曲を、曲名を伏せてそれぞれ1分間聴取させ、それらの楽曲の印象（快・不快、好き・好きではない）を回答するアンケートを実施した（複数回答可）。使用した楽曲は以下に示す10曲である。なお、聴取する楽曲は、音楽史上の一般的な区分である、ルネサンス・バロック・古典派・ロマン派・近代・現代のそれぞれから1曲以上を取り上げることとした。

- ① 小フーガ短調 (J. S. バッハ), ② 「四季」より春 第1楽章 (A. ヴィヴァルディ), ③ 交響曲第9番ホ短調より第1楽章 (A. ドヴォルジャーク), ④ 交響曲第5番ハ短調より第1楽章 (L. v. ベートーヴェン), ⑤ エレクトリックカウンターポイント (S. ライヒ), ⑥ 広島の子供たちに捧げる哀歌 (K. ペンデレツキ), ⑦ レクイエムよりキリエ (J. オケゲム), ⑧ 水の戯れ (M. ラヴェル), ⑨ オペラ「カルメン」より闘牛士の歌 (G. ビゼー), ⑩ 「春の祭典」より生贄の踊り (I. ストラヴィンスキー)

アンケートの結果から、20世紀以降に作られた現代音楽の様式の楽曲は価値判断で意見が分かれているが、⑥ 広島の子供たちに捧げる哀歌 (C. ペンデレツキ) については多くの生徒が不快であると感じ、「好きではない」と判断したことがわかる（図1及び図2参照）。鑑賞の学習において生徒は「不快」「好きではない」と感じられる楽曲に対し、学習に対する意欲が低いことが予想される。ゆえに、調性が無く、不協和の響きをもつ現代音楽の学習に主体的に取り組むためには、学習指導の工夫が不可欠であると考えた。そこで、知覚、感受を深めるアプローチを実践することで、生徒の音楽への価値判断を広げ、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くための指導の効果について検証することとした。

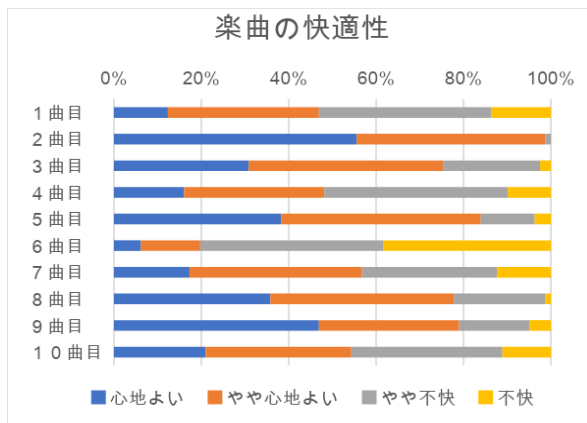


図1 楽曲の快適性に関する調査

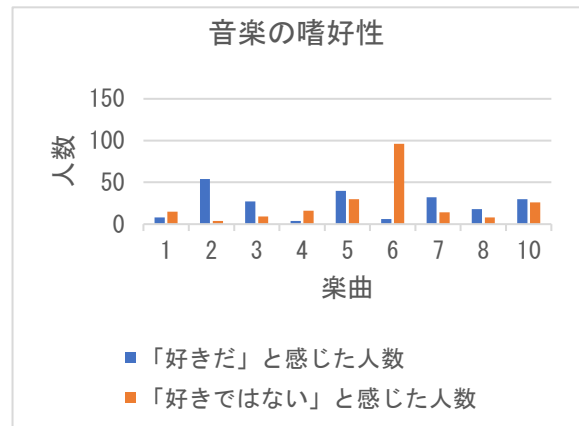


図2 : 音楽の嗜好性に関する調査

#### 2 現代音楽の鑑賞の授業実践

##### 学習指導の概要

○対象：所属校 普通科第1学年 音楽I 選択生 (84名)

○授業科目：音楽I (2単位)

○題材名：「現代音楽のよさを発見しよう」

○教材曲：ジョン・ケージ作曲「4分33秒」

ストラヴィンスキー作曲「春の祭典」

シュトックハウゼン作曲「ピアノ曲X」

○題材の目標

- ・楽器の音色や特徴と表現上の効果との関わり、作曲者の生涯や楽曲の文化的・歴史的背景や、作曲者による表現の特徴に関心を持ち、鑑賞の学習に主体的に取り組む。

- ・音色，リズム，テクスチュアを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，楽曲の文化的・歴史的背景や作曲者及び演奏者による表現の特徴を理解して，楽曲や演奏を解釈したり，それらの価値を考えたりして，音楽に対する理解を深め，よさや美しさを創造的に味わって聴く。

○題材の評価規準

| ア 関心・意欲・態度   | エ 鑑賞の能力  |
|--|--|
| ①楽器の音色や特徴と表現上の効果との関わりに関心をもち，鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。     | ①音色，リズム，テクスチュアを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，楽曲の文化的・歴史的背景や作曲者による表現の特徴を理解して，楽曲や演奏を解釈したり，それらの価値を考えたりして，音楽に対する理解を深め，よさや美しさを創造的に味わって聴いている。 |
| ②楽曲の文化的・歴史的背景や，作曲者による表現の特徴に関心をもち，鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。 |  |

○指導と評価の計画（全4時間）

| 次   | 時間  | 指導計画   | 評価計画          |                      |
|-----|-----|--|---------------|----------------------|
|     |     | ■ねらい ・学習内容   | 関心・意欲・態度      | 鑑賞の能力                |
| 第一次 | 1時間 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■現代音楽の楽曲を聴き，楽曲の歴史的背景や作曲者の表現に関心をもち。</li> <li>・古典派の楽曲と現代音楽の楽曲を比較聴取する。</li> <li>・ジョン・ケージの「4分33秒」を鑑賞し，作曲者の表現意図について考える。</li> <li>・各様式の代表的な楽曲を聴き，西洋音楽史の概観を掴む。</li> </ul>  | ア-①<br>(行動観察) |                      |
|     | 2時間 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■現代音楽の特徴を掴み，作品の生み出す特質や雰囲気を感じ取る。</li> <li>・ストラヴィンスキー作曲「春の祭典」より春の兆しを聴く。</li> <li>・テクスチュアに着目させ，複調が用いられることで醸し出される雰囲気を感じ取る。</li> <li>・ギターの手立Aで二重奏で複調（C Dur と H Dur）の「きらきら星」を演奏する。→手立A</li> <li>・「春の祭典」を再度聴取し，1回目の聴取で感じた印象を音楽的な要素と関連付けて考察する。</li> </ul> |               | エ-①<br>(行動観察・ワークシート) |
|     | 3時間 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■現代音楽に対する理解を深め，よさを創造的に味わって聴く。</li> <li>・シュトックハウゼン作曲「ピアノ曲X」を聴く。</li> <li>・トーンクラスターが用いられることで醸し出される雰囲気を感じ取る。</li> <li>・楽譜制作ソフトを用いて現代音楽の技法を用いた作品を創作し，生徒相互で鑑賞する。→手立B</li> <li>・「ピアノ曲X」を再度聴取し，印象が変わった点，作品の工夫について意見交換する。</li> </ul>                      |               | エ-①<br>(ワークシート)      |
|     | 4時間 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■現代音楽の表現の特徴に関心をもち，よさについて考察する。</li> <li>・「現代音楽のおもしろさ・作品のよさとは何だろうか」というテーマで，作曲者の意図を踏まえて考えさせる。</li> <li>・グループごとに意見交流する。</li> </ul>  | ア-②<br>(行動観察) |                      |

### 3 授業実践の内容及び結果

#### (1) 演奏に関連させたアプローチ【手立て A】

##### ① ストラヴィンスキー作曲『春の祭典』より「春の兆し」を聴く

ストラヴィンスキー作曲の春の祭典は 1913 年に作曲され、原始主義を代表する楽曲である。第 1 部の「春の兆し」の冒頭部分の和音は E♭ 音を根音とする属七の和音と F♭ 音を根音とする長三和音として記譜されている。2つの和音を調性の文脈で考えた場合、E♭ 音を根音とする属七の和音の和音は E♭ Dur の V 度の七の和音であり、多くの場合 A♭ Dur の I 度に進行して調性が確立することが期待される。一方、F♭ 音=E 音を根音とする長三和音は E Dur の I 度であることが期待される。つまり、ここでは複調が用いられていると解釈できる。

授業においては、何も説明をしない状態で「春の兆し」の冒頭部分の強烈なリズムを鑑賞させた後、感じた印象をワークシートに記入させた。(表 1 参照) 多くの生徒が、生徒 A のように雑音や騒音のように聞こえると記述した。生徒 B は音楽の印象をディズニー映画の音楽のようだと感じ、複調による不協和音と原始的なリズムから「恐ろしい感じ」と判断したと考えられる。

表 1 「春の兆し」冒頭部分についての生徒の記述

| 生徒 | 楽曲から感じた印象                        |
|----|----------------------------------|
| A  | 雑音が鳴っているように感じる。不協和音。             |
| B  | ディズニーに出てくる音楽みたいだと思った。<br>恐ろしい感じ。 |

##### ② 演奏と関連させて複調によるテクスチュアの効果を感じ取る

次に①の部分にテクスチュアとして複調が用いられていることについて説明したそして、複調の構造を理解させ、表現上の効果を感じ取らせるために、ギターの既習曲である「きらきら星」を用いて、通常のチューニングによる C Dur の旋律とチューニング自体を半音下げた H Dur の旋律を同時に演奏させた。(譜例 1)。表 2 は復調による「きらきら星」をギターで演奏した感想を生徒が記述したものである。

譜例 1 複調による「きらきら星」(指導者作成)

表 2 演奏後の生徒の記述

| 生徒 | 演奏した感想  |
|----|---|
| A  | ハ長調の旋律を 2 人で一緒に弾いたときには濁りがなかったが、半音ずらして弾いてみると違和感しかなかった。正しい位置で弾いているはずなのに間違っただけ演奏しているように聞こえた。 |
| B  | 弾いているとイライラしてきて不安な気持ちになった。胸がザワザワする響きだと思った。半音ずれていて響きがずっと交わらなくて一体感がなかった。                     |

ギターの運指は C Dur と H Dur で変わらないものの、半音ずれたチューニングにより慣れない響きに戸惑った様子の生徒が多くみられた。生徒 A は「正しい位置で弾いているはずなのに間違っただけ演奏しているように聞こえた」と述べており、口頭でも「自分が下手になったみたいだ」と述べていた。生徒 B は半音ずれていることで響きが変化し、テクスチュアの違いにより楽曲の印象が大きく変わることを感じ取っていると考えられる。

#### ② 「春の祭典」を再度聴取し、1 回目の聴取で感じた印象を音楽的な要素と関連付けて考察する

再度楽曲を聴取させ、1 回目の聴取で感じた印象について、なぜそのように感じたのか、音楽を形

づくっている要素と関連させて聴き取るよう指導し、その上で楽曲に対する評価を記入させた。表3は生徒のワークシートの記述である。

表3 楽曲に対する評価について生徒の記述

多くの生徒が授業の初めの聴取では雑音のように聴こえた音楽が複調によって無調的な響きが作られていることを聴き取り、それが作曲者の工夫であると気付いたと記述している。生徒Aは「新鮮だと思った」と現代音楽の新規性を評価している。生徒Bは音楽を形づくっている

| 生徒 | 楽曲に関する評価   |
|----|--|
| A  | 恐怖感のある不協和音が独特の雰囲気醸し出していると思った。これまでに聞いたことのない曲で新鮮だと思った。                               |
| B  | 2回聞いても怖いと思った。音を半音ずらすだけで響きが変わることがおもしろいと思った。不協和音とリズムが合わさって悪者が迫ってくるような迫力が出るのがすごいと思った。 |

要素によって生み出される雰囲気が変わることを感受し、初回に聴取した際に「ディズニーのような音楽」だと感じた理由は「不協和音とリズム」の効果によるものだと考察したと考えられる。

(2) 即興・創作に関連させたアプローチ【手立てB】

① シュトックハウゼン作曲「ピアノ曲X」を聴く

1952年から1961年に書かれた『ピアノ曲』は、I～XIの全11曲から成る作品である。とりわけ、ピアノ曲Xはトーンクラスターを多用した楽曲であり、現代音楽の作曲技法の効果を生徒に感じ取らせるのに適した作品であるといえる。授業においては、楽曲について何も説明をしない状態で聴取させ、初めに楽曲について感じた印象をワークシートに記述させた(表4参照)。

表4 楽曲から感じた印象の生徒の記述

楽曲の聴取の際にはトーンクラスターによる音の響きに多くの生徒が驚いた反応を示し、生徒Cは「ピアノを雑に弾いている感じ」、生徒Fは「急に天罰が下った感じ」と記述し

| 生徒 | 楽曲から感じた印象                                 |
|----|---|
| C  | ピアノを雑に弾いている感じがした。自分にも弾けそう。                |
| D  | 音が細かかったり切れていたりして全然聞き取ることができなかった。わけがわからない。 |
| E  | 演奏している人は怒りを感じているのかと思った。                   |
| F  | 急に天罰が下った感じがした。                            |

ている。生徒Dはピアノ曲X第1小節目のような部分を「音が細かかったり切れていたりして全然聞き取ることができなかった」と記述している。生徒Eは楽曲全体について「怒りを感じている」音楽だと判断している。

③ トーンクラスターを用いた現代音楽作品を作る

今年度、本校では生徒1人1台のiPadを導入している。トーンクラスターを用いた音響の効果について感じ取らせるため、それぞれがダウンロードしたフリー楽譜制作ソフト「Flat」を活用し、即興的に音を鳴らす体験をしながら楽曲として構成するというアプローチを試みた。

「Flat」は画面上の鍵盤を押すと、その音が五線譜に入力される。生徒は鍵盤の音を確認しながら音を並べ、トーンクラスターを用いた作品を創作した。その後、3～4名のグループに分かれ作品を再生し、最もおもしろいと感じた楽曲を1つ選び、その理由を発表した。作品1、作品2は生徒作品である。

作品1を作った生徒は、ト音譜表に16分音符の一定のリズムに乗せて不協和音を作っている。ヘ音譜表には四分音符で「きらきら星」の旋律である。作品の工夫について「複調できらきら星をやっておもしろかったので、トーンクラスターときらきら星と一緒に演奏したらどうなるか実験してみた。

## 【作品 1】

Score created with the free version of Flat - <https://flat.io>

♩ = 70

Piano

密です

2

3

4

The image shows a piano score for a piece titled 'Secret' (密です). It consists of four systems of music. The first system includes a tempo marking of quarter note = 70. The score is written for piano in 4/4 time. The melody is primarily in the right hand, while the left hand provides a steady accompaniment. The piece concludes with a final chord in the fourth system.

音源を流してみると知っているメロディが隠れているようになってい」と述べ、現代音楽の技法を自分なりに消化して創作していることがわかる。

作品2を作った生徒は作品の工夫について「ただ同じように和音が続いてもおもしろくないので、動くところと止まるようなところを作ってみた。3小節目の低音で時が止まったようにしたあとに急に高い音が出てきて再び動き出すようにしたのがポイント」だと述べている。この生徒はトーンクラスターの音の響きに着目しただけではなく、音楽全体の構成を考え工夫して作品を創作していることがわかる。

## 【作品 2】

Score created with the free version of Flat - <https://flat.io>

♩ = 80

Piano

満

1

The image shows the first system of a piano score for a piece titled 'Full' (満). It includes a tempo marking of quarter note = 80. The score is written for piano in 4/4 time. The melody is in the right hand, and the left hand features a complex, dense accompaniment with many notes. The piece ends with a final chord in the first system.

Score created with the free version of Flat - <https://flat.io>

2

The image shows the second system of the piano score for 'Full'. It continues the complex accompaniment in the left hand and the melody in the right hand. The piece concludes with a final chord in the second system.

### ④ 「ピアノ曲X」を再度聴取し、印象が変わった点、作品の工夫について意見交換する

再度「ピアノ曲X」を聴取させ、1回目の聴取で感じた印象について、なぜそのように感じたのか、音楽を形づくっている要素と関連させて聴き取るよう指導し、その上で楽曲に対する評価を記入させた。表5は生徒のワークシートの記述である。



表5 楽曲に関する評価の生徒の記述

| 生徒 | 楽曲に関する評価  |
|----|---|
| C  | 自分で作品を作ってみるとただ雑に弾いているだけでなく意外と考えられて作っていることがわかった。でも自分は普通のメロディの曲の方がいいと思う。  |
| D  | 最初はわけがわからない音楽だと思ったが、単調に聞こえないように、リズムが停滞しているところと、細かく動いているところの差があり、緩急をつけて作品が作られていることがわかった。おもしろかった。                           |
| E  | 楽曲の印象は初めに聞いたときからあまり変わらなかったが、2回目に聞いたときのほうが一つ一つの音の塊がしっかり聞こえてきて、スロー再生で聞いているような感じがした。2回目に聞くとただ音が鳴っているだけでなく、きちんと音楽に聞こえる箇所があった。 |
| F  | 突然雰囲気が変わるのがおもしろいと思った。トーンクラスターが連続していることで、ピアノの演奏の仕方も変わり、叩きつけるような音色に変わっていた。  |

生徒C、生徒Dは作品を作ったことによって「ただ雑に演奏されている」と感じた楽曲が、音の組み合わせや構成が工夫させて作られていることに気付いている。生徒Cはそのことを感じ取った上で19世紀以前のようなメロディのある曲の方が良いと述べており、音楽における旋律の大切さについて認識している。生徒Eは「きちんと音楽に聞こえる」と記述しており、聴取と創作活動を関連させたことによって楽曲を単なる「音」ではなく「音楽」として認識するように変化したと考えられる。生徒Fは、ピアノ曲Xの第4小節目のトーンクラスターの演奏技法による叩きつけるような音色に対して「天罰が下ったような音色」と評価しており、楽曲の印象を音楽の要素と結び付けて考察することができている。

### (3) 現代音楽のおもしろさ・作品のよさについて考察する

授業のまとめとして、生徒に「現代音楽のおもしろさ・作品のよさとはなんだろうか」というテーマで自らが考える現代音楽の価値について意見交流をした。表6は生徒の記述である。

表6 生徒の記述

| 生徒 | 生徒が考える現代音楽の価値   |
|----|---|
| B  | 社会への不満を表していると思った。戦争の体験を音に表すとすれば、これまでに作られたような美しい響きではなく、トーンクラスターなどを使った汚いと感じる響きも必要だと思った。 |
| C  | 型破りな音楽を作ることで、今までになかった音楽の視点に気付くことができる。   |
| G  | 常識に捕らわれないことで新たな価値観や世界観を築き上げている。   |
| H  | 現代音楽は今までにない音色やリズムで作られているので、全部聞くまで何が起こるかわからないところがおもしろいと感じた。逆に興味をそそられる。                 |

生徒C、G、Hのように現代音楽の新規性について評価が数多く見られた。生徒Cは「今までになかった音楽の視点に気付くことができる」と述べており、より多角的に音楽を聴き、新たな価値判断の基準を手に入れたことを表していると考えられる。生徒Bは戦争を例に挙げ、作曲者の表現の意図を実現するためには「これまでに作られたような美しい響きではなく、トーンクラスターなどを使った汚いと感じる響きも必要」と述べており、不協和的な音響が単に斬新で意外性があるものというだけでなく、楽曲の要素として不可欠であると評価している。

学習のはじめの聴取においては、楽曲に対して漠然と「汚い」と感じていた生徒が大多数であり、



音楽として感じ取ることはできていなかった。アプローチを通して、『春の祭典』では複調によるテクスチャと刻むリズムの効果により、恐ろしく迫力のある感じが生み出されていると感じ取る生徒が見られた。『ピアノ曲X』ではピアノの音色がトーンクラスターの技法を用いることによって変化し、これまでに聞いたことのない響きが生み出されていることを感じ取っていた。その結果、学習の最後には生徒Hのように作曲家の工夫に対して「おもしろい」「興味をそそられる」と感じた生徒が見られた。このことは2つの手立てによって知覚、感受が深められ、音楽のよさを味わうことができたことによって音楽の価値意識が拡大したものだと考えられる。

## IV 研究のまとめ

### 1 研究の成果

今回、鑑賞学習において現代音楽の作品を取り扱い、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くための指導の工夫として演奏や即興・創作と関連させるアプローチを用いて授業を行った。

演奏に関連させたアプローチ【手立てA】では、生徒が実際にギターを演奏して複調による音の重なりを体験したことでテクスチャの働きについて実感を伴って理解することができ、曲想と構造を関わらせて現代音楽のおもしろさを自ら味わうことができた。

即興・創作に関連させたアプローチ【手立てB】では、ICT機器を活用し、即興的に音を鳴らしながら現代音楽の技法の一つであるトーンクラスターを用いて創作する体験を通して、生徒は作曲者の表現の工夫に気付くことができた。その結果、生徒は現代音楽を単なる「音」ではなく「音楽」として認識し、楽曲のよさを自ら味わって聴くことができた。

以上のことから、現代音楽の鑑賞学習において、演奏や即興・創作と関連させるアプローチは音楽を形づくっている要素に関する理解を促し、知覚・感受を深める手立てとして有効であったと考える。また、現代音楽を鑑賞教材として取り扱ったことで、これまで学習した20世紀までに作られた音楽についても価値観を更新している生徒が見られた。このことから、現代音楽を学習し理解を深めていく経験を通して、生徒の既存の知識が再構築され更新されていると捉えられ、多角的な視野をもって音楽と向き合うなど音楽文化と幅広く関わる資質・能力の育成につながると考えられる。

### 2 今後の課題

今回は聴き方の焦点化を図って学習を行ったが、楽曲を最初から最後まで通して聴取させる経験が不足していたように思われる。演奏や即興・創作と関連させるアプローチによって音楽を形づくっている要素に関する理解を促すことはできたが、生徒の楽曲に対する気付きは要素の働きに言及したものがほとんどであり、楽曲全体を評価する記述があまり見られなかった。知覚・感受を積み重ね、楽曲そのものを深く聴き味わうことについては不十分であったと考えられる。今後は生徒の聴取を深化させるための工夫についても考える必要がある。

今後、学校現場のICT環境は大きく変わることが予想される。鑑賞におけるICT機器の活用によって生徒たちの主体的に音楽を聴く態度の育成につながるよう、機器の活用の仕方についてさらに検討していきたい。また、音楽的な見方・考え方を働かせ、知覚と感受の関係を深める学習を継続していくために、音楽を形づくっている要素を知覚しやすい鑑賞曲の選定や、聴き方の焦点化について研鑽を積んでいきたい。

<引用・参考文献>

- ・カールハインツシュトックハウゼン，清水穰 訳『シュトックハウゼン音楽論集』株式会社現代思潮新社 pp.270-271, 2001。
- ・『新編 音楽中辞典』音楽之友社 p.222, p.477, 2007。
- ・沼野雄司『リゲティ，ベリオ，ブーレーズ 前衛の終焉と現代音楽のゆくえ』音楽之友社，2005。
- ・文部科学省（平成31年）：『高等学校指導要領（平成30年告示）解説 芸術編』教育図書株式会社
- ・尾形敏幸「『春の祭典』と『ピエロリュメール』は鑑賞教材になり得るのか：現代的作品の音楽美を享受するための志向，判断能力の育成」『洗足学園音楽大学教職課程年報』第3号 pp.31-46, 2019。
- ・中地雅之ほか「現代音楽」のゆくえと音楽教育—その可能性を探る—1)』『音楽教育学』日本音楽教育学会，第39号，pp.60-68, 2010。